

シノドスへの歩み みことばと共に 年間第十九主日C年

小西広志

2022年8月7日

朗読箇所

第一朗読 知恵の書 18章 6 - 9 節

第二朗読 ヘブライ人への手紙 11章 1 - 2、8 - 19 節

福音朗読 ルカによる福音書 12章 32 - 48 節

はじめに

東京教区の皆さんこんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は2022年8月7日、年間第十九主日となっています。今日の三つの朗読をシノドスの教会の観点から読んで味わってまいりましょう。

あの過越の夜

今日の第一朗読の『知恵の書』は、聖書の中では知恵文学と呼ばれるジャンルに属する文書です。『知恵の書』はイエスさまがお生まれになるおよそ百年ぐらい前にユダヤ人が多く住んでいたといわれているエジプトのアレクサンドリアで成立したと考えられています。当時、地中海世界全体に広まっていたのはギリシアを發祥とするヘレニズム文化でした。『知恵の書』はヘレニズム文化の影響でユダヤ人たちが忘れかけていた古来からの知恵の尊さ、すばらしさを伝えるために書かれた文書です。全体は三つの内容に分かれます。「知恵と人生」(1-6章)、「知恵の本質」(7-9章)、「イスラエルの歴史における知恵のはたらき」(10-19章)です。

今日の朗読では、エジプト脱出の出来事で働く神の知恵について述べられています。滅びへと向かうエジプト人に対して、いのちへと脱出するイスラエルの民が伝えられています。冒頭の「あの過越の夜」(フランシスコ会訳では「あの夜」となっています。)と歴史の出来事に読者の注意を向けさせ、「そのとき彼らは先祖たちの賛歌をうたっていた」と過越の祭の起源へと関心を喚起しています。ギリシアの文化であるヘレニズム文化に出会ったイスラエルの人々は、急速にその文化に染まっていったことでしょう。しかし、古来から大切にしてきた「過越の祭」だけは捨て去るわけにかなかったのです。祭りの意義は失われ、形式だけが残されていたのだと思います。『知恵の書』の作者たちは、祭りの本当の意味を読者に思い起こさせようとしているのです。それが「あの夜」にこめられた意味だと思います。

目を覚ましている

今週も第二朗読は省いて、福音朗読に移りましょう。今日の福音朗読はこれまでと同様にイエスさまがエルサレムへと向かう旅の途中での出来事です。今日の福音朗読では最初に勧めがあって（32-34 節）、そしてイエスさまの二つのたとえ話（35-40 節、42-48 節）から成り立っています。二つのたとえ話に挟まれて、ペトロの問いかけがあります。37 節にある「目を覚ましている」に注目してください。ギリシア語ではグレーゴレオーと言うそうです。この単語は、キリスト信者のあり方の特徴を表す言葉として、初代教会ではよく使われていたそうです。

今はまだ夜であって、眠るのが当然なのに、キリスト者だけが目覚めていることができるのです。夜は悪が暗躍する時です。しかし、「光の子、昼の子」（1 テサ 5 章 5-6 節参照）とパウロが言うように、キリスト者は、救いの時である昼に属しているのです。

まとめ

今日の第一朗読と福音朗読のつながりを見つけだすのは難しいように思います。『知恵の書』の作者たちが「あの過越の夜」と、歴史の事実へと注意を向けさせて、ヘレニズム文化に染まりつつあるユダヤ人たちを目覚めさせようとしています。ですから、物事を見る視点は過去へと向かいます。「かつて、こんなことがあったんだ」、だから「今も、過越の祭を祝っているのだ」と訴えかけてきます。

それに対して、福音朗読では「人の子は思いがけない時に来る」と、イエスさまはわたしたちの視点を未来へと向けます。「人の子は思いがけない時に来る」、だから「目を覚ましていなさい」と語りかけています。

しかし、今ひとつ分からないのは福音の中心となる「はっきり言うておくが、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる」（37 b 節）です。なぜ、主人は給仕をしてくれるのでしょうか。東京教区の雨宮神父さまの解説を参考に考えてみましょう。「そばに来て」と訳された単語はギリシア語では「パレルコマイ」です。この言葉は『ルカによる福音書』では、17 章 7 節にも使われています。「あなたがたのうちだれかに、畑を耕すか羊を飼うかする僕がいる場合、その僕が畑から帰って来たとき、『すぐ来て食事の席に着きなさい』と言う者がいるだろうか。」「食事の席に着きなさい」の「着きなさい」が「パレルコマイ」です。この言葉の意味は「進み寄る、近寄る、進み寄って来て、そばに来る」です。ですから「食事の席に進み寄りなさい」という招きの言葉になります。しかし、今日の福音朗読では、「パレルコマイ」に別な意味も重ねているようです。その点に注意しながら解説を試みてみましょう。この単語は『マルコによる福音書』でも使われています。「ところが、逆風のために弟子たちが漕ぎ悩んでいるのを見て、夜が明けるころ、湖の上を歩いて弟子たちのところに行き、そばを通り過ぎようとされた」（マコ 6 章 48 節）。「そばを通り過ぎよう」が「パレルコマイ」です。この箇所も不思議です。逆風で漕ぎ悩んでいる小舟を見て、イエスさまは「そばを通り過ぎよう」とするからです。助けてくれません。実は、この「パレルコマイ」には、神さまの現れ（少し難しい表現で神の顕現）を指す特別な意味があるのです。『出エジプト記』には「主は彼の前を通り過ぎて宣言された」（出 34 章 6 節）とあります。これは神さまがモーセの前を通過したという意味ではなく、モーセの前に現れて言葉をかけたという意味です。「通り過ぎる」を使って、旧約聖書では神さまが人

間に現れて、親しく交わられたという事実を表現しているのです。「そばを通り過ぎようとされた」とは、旧約聖書の用例から考えて、漕ぎ悩み、恐れに震えているお弟子さんたちの前にイエスさまが神さまとして現れて、嵐を静めて、恐れから解放したことを意味しています。今日の福音朗読も神さまの現れと考えてよいのではないのでしょうか。帯を締めて給仕してくれる主人とは、神さまに他ならないのです。

それではまた来週。